テ諸侯ノ御供舟ドモヲ漕浮ベテ、大幕ヲハシラカシ、武具ヲ飾リ、御舟印等川風ニ飜シ、誠ニ見ル目モイサギヨク、深川、中川新田島、佃島川モ陸モ見物ノ貴賤サヾメキ渡リ、興ニ入計リナリ、寔ニ

〔今日ノ暮行空ヲヲシマヌ者ハナシ、

天地丸ハ、八十丁公方家召ス、

大龍丸ハ、六十丁御詰衆乘リ玉フ、

龍王丸ハ、御譜代ノ諸大名衆乘リ玉フ、

〔續視聽草　五集　九〕墨水遊覽記

二日〇天保十四年九月の朝とく、傳奏の館に、人々つどひて、御出たちを待ほど、空いとくらし、雨氣ならんと、あやぶみ思ふに、やゝ明はてゝ、雲間の日影ほのめき出る比、兩卿〇德大寺實堅、日野資愛、輿よせて出給ふ、大城のうちなる瀧落る邊の汀に艤してまちまうけせり、各こゝにありて見え奉る、名だいめんめきて、高家の人々執申さる、御船は麒麟まろとなづけられたるに、こゝをしも龍の口と聞ゆるも、その名おのづから相あふこゝちするに、ふねやかたに鳳凰をさへゑりつけたる、又つきづし、

〔甲子夜話　二十三〕泉州ノ回船、何クノ沖ニヤ、夜中颶風ニ逢、船覆リ人皆沒ス、此中一人、小板ノ浮ヲ見テ、コレニ取ツキ、遊泳シテ天明ニ至ル、〇中略久シテ海巖ノ所ニ到ル、喜ビ上ラントスルニ、忽披髪ノ童子來集テ、竿ヲ以テツキ出シ、上ルコトヲ得ズ、又沖ニ泳ギイデタルニ、漸々風靜リ天晴レ、時幸ニ本船ノ帆ヲ張テ來ルニ逢フ、乃手ヲ擧テ招ケバ、端舟ヲ卸シ救ヒアゲタリ、卽蘇生ノ心シテ、賴ミ持シ板ヲ見レバ、金毘羅權現ノ守板ナリ、始テソノ靈助ナルヲ知テ、尊仰シテ歎語セルヲ船頭聞ツケ、其札ヲ乞フテ止マズ、彼男モ與ルコト無ラント爲レドモ、亦救恩默止ガタケレバ、遂ニ札ヲ授ケタリ、船頭乃此船魂ト祭リ、船ヲ金毘羅丸ト名ヅケヌ、